

史料館所蔵最古の歩兵第十六聯隊史

「第六回」明治三十七八年戦役

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【奉天大会戦】

窮余の一策、乃木軍の北進するに先立て、我が防御希薄なる左翼を蹂躪して、連敗の態勢を挽回せんとしたる企図も東北健児の奮闘に依って又もや潰敗の悲運に陥り、流石のクロパトキン将軍も手を供して呆然自失するの時、我が軍は新たに鴨緑江軍の編成成り、乃木軍の主力は新設の諸団隊と共に続々北上して満州軍主力に増加し、全軍の志気は忽ち倍加の旺盛を致した。

此の時両軍の戦線は、渾河沙河の間に相対して延長実に五十里、壘を高くし、壕を深くし、互いに守備を厳にして対陣すること既に五ヶ月、両軍の兵力は合して八十万、砲二千五百門を越えるに至った。

柳芽漸く伸びて、春風堅氷を解くと共に戦機は徐々として動き初め、我は敵の準備完成に先立って之を撃破せんものをと、野津軍を中央として、黒木軍其の右に連なり、奥軍は左に続き、川村軍は黒木軍の右に接し、乃木軍は奥軍の左に亘り大規模の包囲作戦を以って、二月二十五日より攻撃運動を起した。

川村軍は敵を山地に牽制し、乃木軍は其の虚に乗じて敵の右側を繞回して其の背後に進出し、茲に世界歴史にも希なる大戦闘の幕は開かれるに至った。

【達子堡附近の戦闘】

二月二十一日、聯隊は軍司令官の直轄となりて蛤蟆塘に移転し、命を待つこと旬日、三月一日命に依って宿营地出発、南勾・前柳峪附近に到りて露營し、翌二日近衛師団長の指揮下に入り三日、侯家屯に至りて其の予備隊となる。

(近衛師団に配属)

当時近衛師団は唐家台高地の敵を攻撃中にして、未だ其の目的を達せず、殊死奮戦の真中であって、午前五時候家屯に達すると共に「前面の状況大いに切迫せり、谷山大佐は二個大隊を率いて、渡辺第二旅団長の指揮下に入るべし」との師団命令に接し、第三大隊を師団予備として侯家屯に留め、谷山聯隊長は第二・第一大隊を率いて、天明敵の砲撃を冒して達子堡に進出して右翼隊長渡邊少将の隷下に入り、直ちに第一大隊を近歩四の右翼に増加して唐家屯東北方高地の敵に当たらせた。

同大隊は敵の管制下に平然として平坦開闊なる地域を前進して、邊牛緑川（沙河の一部）の線に達した。先着の近衛諸隊も皆此の附近に膠着し在りて、爾後の前進は容易ならず、僅かに半身を蔽うに足る河岸を利用し、身を氷上に伏せて苦戦夜に入る。

日暮れて後、敵の射撃は一段と酷烈を加え又しばしば逆襲し来るなど、徹夜騒擾を極めた。第九・第十中隊は第一線に増加され、第十二中隊は姚千戸屯附近に在りて我が左翼を警戒し、第二大隊は万一の場合を慮り、達子堡北端の圉壁を占領して（第一線部隊を收容する為）夜を徹した。

（鉢巻山の奪取）

翌四日も状況は毫も前日と異ならず、徒に敵の銃砲弾を浴びつつ終日一步も進むこと能はず、殊に上蘇麻堡子北方敵線上に我に向って凸出せる小高地あり、頗る險峻にして四周を管制し、以って敵の戦術要点となっている、敵は此処に堅固なる防御工事を施し、機関砲を備えて猛威を恣にし、勇敢なる近衛兵の数回の強襲も未だ功を奏せずして、依然我が攻撃軍を悩ませていた。

午後六時に至り渡邊少将より、「谷山大佐は近歩一の三大隊、歩十六の第二大隊・及び第一・第九中隊、工兵一個小隊、迫撃砲三門を率い午後十時邊牛緑川を渡り鉢巻山の敵壘を攻撃すべし」との命令を接受した。

該高地には数条に散兵壕ありて、遠くより望めば恰も鉢巻を為せるが如きを以って、当時斯くの呼称をされていた。

谷山大佐は午後十時十分諸隊を率いて鉢巻山に前進し、敵の猛射を受けつつ敵に応射を禁じて、午後十一時同高地脚に達し、先ず決死の戦場捜兵を出して敵壘の形状及び副防御の状況を偵察せしめ、次いで工兵及び歩兵の投爆手は驟雨の如き敵弾を潜りて鉄条網を切断し、爆薬を投じ、迫撃砲を撃ち込み、此の間に突撃隊は密かに山腹を攀じ登り、突如一斉に白兵を揮って敵陣に突入し、一時間余に亘る混戦乱闘の後、遂に守備兵を潰乱せしめて敵の鎖鑰（さやく：外敵の侵入をくい止めるべき要所）にして我が眼の上の瘤たる鉢巻山を占領した。

然しながら敵兵は未だ同高地を棄てず、残兵は尚最頂の鉢巻たる散兵壕を北半部に依り、我は其の北半部を占領し、互いに両翼の一端を閉鎖して剣光相触れるの間に対峙し、敵の逆襲に備える為に鉄板の如く凍結せる土地を掘って防御工事の補修に従事した。

此の日、近衛師団は全線に亘りて一大苦戦に陥り、危うく全滅にも陥らんとしたが、此の鉢巻山の攻略は敵線に一大間隙を生じせしめ、友軍をして真に蘇生の思いあらしめた。

(攻略後の苦戦)

果然五日払暁、約一個中隊の決死隊は猛然として我が占領陣地に逆襲して来た。将校は白刃を揮って真先に進み、決死の士卒は手に手に擲弾を提げて夜暗に乗じて肉薄し来り、怪しき物音に我が歩哨が闇に透かして之を発見せる瞬間には既に白刃頭上に閃き、爆弾却下に碎けるといふ有様にて、其の勇猛なる突撃振りは敵ながら天晴れであった。

我が将卒、争いでは之に劣らん、一等卒馬島勝次郎は銃を構える暇もなく、銃床を振って真先に進み来る敵将校の頭骸を打碎き、上等兵鹿島峰作は敵将に組み付き、其の咽喉を食い破って相抱いて斃れたる如き、其の格闘の如何に惨憺股壮烈を極めたるかを推して知るべしである。

午前六時に約二個中隊、同七時半に約二個中隊、午後三時頃更に一回、併せて四回の逆襲を受け毎戦奮闘して之を退けたが、第二大隊長代理須賀田大尉以下の損害は頗る多かつた。

是に於いて第二戦のある聯隊長に対して、「機関銃、迫撃砲の送致並びに死傷者の収容を乞う」といふ伝令を発せんとした時、第七中隊一等卒小島時重次郎は自ら進み出て「其の伝令は、何卒私に命じてください」と希望し、第一線諸隊の運命を左右すべき此の重大なる任務を双肩に荷い、勇躍奮進第二線をめがけ一直線に駆け出した。

「伝令」と見るや、期せずして数百千の敵の銃口は彼の一身に集まり、弾丸は雨の如く彼の身边を襲ったが、あ々天佑なるかな、小島一等卒は無事聯隊長の許に達して使命を全うし、隊長の切なる制止をも聞かず、之を復命すべく再び敵の猛射を冒して第二線より第一線に向って駆け出した。

此の勇敢無比の武者振りに敵は何と思つたか、ハタと射撃を中止せるのみならず四五の将校は掩蓋上に躍り上がって拍手し、我が第一第二線の将卒も之に和して歓呼したのは、徐に那須与一の記事を思わしめた。夜に入って師団予備たりし我が第三大隊は、機関砲二門、工兵一個小隊と共に第一線に増加せられ、鉢巻山と上蘇麻堡子間に進出した。

六日も終日敵前に暴露して日没に及び、敵歩兵約三個中隊、第三大隊の正面に来襲して白兵戦、爆弾戦を交えること一時間半、七日払暁又一个中隊上蘇麻堡子に来襲した。

去る三日渡邊少将の隷下に入って以来、氷上に伏し、風雪に晒されて、昼夜間断なき悪戦苦闘を続けること実に五昼夜に及んだ。

七日午後零時三十分より同六時迄、一時休戦して相互に死傷者を収容し、午後六時以後師団は進撃に移り、聯隊は命に依って北部達子堡に集合した。

【葛布街附近の戦闘】

七日夕、近衛の第一線部隊が追撃前進に移ると共に、聯隊は同第一旅団長梅澤少将の旗下に転じて第二線となり蔡家屯附近に進出し、次いで八日、本属師団に復帰を命ぜられ五道嶺附近にて第二師団の序列に入り、九日は師団前衛となりて在家堡子より和気村大瓢屯を経て前葛布街に向って前進した。

此の日は例の大風、砂塵を飛ばして荒狂った日で、四顧晦冥、ややもすれば隣兵との連絡すら失せんとする困難を物ともせず、薄暮葛布街南方渾河左岸に達した。

十日黎明、第二大隊を前兵として計軍屯の露营地を発し、渾河を渡って前葛布街に進入した。前葛布街は前夜敵の為に焼かれ、時に尚余焰を吐きつつあり、且つ敵は部落より百メートルないし二百メートルを隔てる北方並びに東北方の懸崖に依りて我を猛射した。

なかんづく村落東側に突出せる一丘阜は、彼の上蘇麻堡子北方の鉢巻山と等しく眼の上の瘤であった。依って第八・第十二中隊の各一部をして該高地を奪取せしめ、次いで山本大尉は第十二中隊の全部と第八中隊の一個小隊を率いて同高地に至り、其の占領を確実ならしめた。

午前十時頃より敵兵漸く増加して我を凌ぎ、午後に至りて敵兵約四百、此の突出高地に逆襲し来たり、混戦乱闘、或いは刺違えて斃れ、或いは相抱いて断崖に転落し、死力を尽くして防戦したるも衆寡敵せず、僅かに稜線直下の岩角に依りて最後の抵抗を試みる。

此の時第九中隊は急馳して増援し、又配属の砲兵及び第二大隊は側面より敵に猛射を加え、危機一髪の間態勢を回復して此の敵を撃退した。此の際聯隊長谷山大佐は右上膊に貫通銃創を受けたが、応急手当を受け白布にて右手を吊りたるまま依然として指揮を継続した。

斯かる間に師団の攻撃準備全く成りて、一斉に攻撃前進に移り午後三時半敵兵動揺の色あるに乗じて、左翼歩二九と連携して敵陣に肉薄し、遂に前面一帯の高地を奪取した。四時四十五分より追撃に移り、八時半孤家子に達して宿営した。

聯隊の葛布街北方高地占領に次いで、師団は全線進撃に移り、十一日朝聯隊は孤家子を発して仙人洞嶺～下四白山を経て午後六時半小西溝に達し、附近高地を占領して八家溝西方高地に依れる敵兵に対して明払曉の攻撃を準備し、十二日午前三時、将に攻撃前進せんとするに際し、敵兵早くも退却し去りたるを以って直ちに同地西北鞍部を占領し、次いで丁家溝に進み同夜上下未台沖に宿泊す。此の日優渥なる勅語を拝し、同時に我が軍は十日、奉天城を占領せる快報に接して志気更に百倍した。

十三日朝、榮台城西北端畑地を発して午後四時半石家威子に到りて宿営し、十四日払曉

前旅団は蘇牙屯東方突出高地に抛りて、我が前進を拒支する敵を攻撃す。同高地には約一個大隊の歩兵新たに工事を施して占拠し、尚其の北方老官台にも一個大隊の敵兵あり。

此の日谷山大佐負傷後疲労の為、高野少佐代わって聯隊を指揮し左翼村松聯隊と連繫して、第一・第三大隊を第一線となし雨注する敵弾を冒して驀進し、險峻を攀じ白刃を潜りて壘内に突入し、午前十時十分遂に此の敵を茨楡台方向に撃退したが、附近各所の高地には尚多数の敵兵在りて、機を見て逆襲せんとする形勢なるを以って、応急工事を施して嚴重に守備し戦闘隊形のまま夜を徹した。

【鉄嶺占領・奉天戦終局】

十四日夜半、鉄嶺方面に火災起こり、火焰天を焦がさんとす。是恐らく敵の鉄嶺を退却せんとするに相違なしと、十五日払暁より急行軍を以って鉄嶺に向い、十六日午前十時を以って鉄嶺の新舊二街を占領した。

然しながら同地は全軍の作戦上、野津軍の進路に属するを以って師団は翌十七日、守備を前田支隊に譲って再び范河々畔の張家樓子に引返し、暫く休養の姿勢を取り、茲に奉天大会戦の幕は閉じられた。

【奉天戦後の帯陣】

鉄嶺に守備を第四軍に譲って、師団が范河々孟の古戦場たる張家樓子附近に転宿するや、聯隊は三月十九日より杜樓子附近に宿営し、帯陣四十余日、次いで五月上旬に至り次期の作戦準備として警戒線を清河の右岸に進めるに及びて、聯隊は開原附近理家堡子に移り、村松聯隊と交互に威遠堡門の敵に対して警戒し、六月十一日更に方家屯に進んで宿営、相変わらず孜々として前進の準備を整える傍ら、万一を慮って占領地に防御工事を施し、日が経つに従って知らず知らずの間に堅牢無比の設堡陣地を見るに至った。

然しながら辺戍久しきに亘り、日夜単調なる同一業務を繰返しつつある時は幾分か将卒の士気も緩み鋭鋒も又鈍らんとする恐れあるを以って、演習に操練に専ら戦闘力の充実熟達に努めると共に、或いは兎狩りを催し、川漁りを行い、又膂力ある者は相撲を催し、歌舞の素養あるものは演技を行い、果ては加治川部屋（新発田市に流れる河川）菖蒲座の役割割り、隊中には其れ等の本業者も少なからぬ事とて、役者の衣装から舞台道具、力士のまわしに至るまで完備し、此处彼処に諸種の興行を見るに至り間接に士気を鼓舞した。

斯かる狂喜の間にも、忽ち将卒をして顧みて暗涙を吞ましめるものは、戦没の僚友と此の喜びを俱に出来ざる一事である。征战既に一年と数ヶ月、戦病没者の数は七百を超え、最初共に鎮南浦に上陸したる者を求めれば、一個中隊僅か数名に過ぎぬ有様となり、うたた追惜の情に堪えず。

四月二日には張家樓子に於いて師団の招魂祭行われ、五月一日には第一軍の大招魂祭行われ、同日聯隊も又弔祭を兼ねて九連城戦勝記念会を催し、同六日には沙澣屯兵站司令官

の主催にて遼陽附近岡崎山の建碑式が行われた。

六月十六日聯隊長谷山大佐は陸軍少将に進み、近衛歩兵第二旅団長に補せられて当聯隊を去る事となった。顧みれば去る三十三年以来当聯隊を統率して、至敵の軍紀を練り、至鋭の精気を養い、殊に出征以来は驍勇鬼の如く、深謀神の如くにして、吾が聯隊が毎戦抜群の勲功を立てて新発田聯隊の武名をして、嘖々全軍に喧伝せしめたるもの、実は一に大佐の指導と鼓舞による。

十八日、方家屯の新築借行社に於いて祖道の宴を張り、各自或いは荒涼の野に新菜を求め、或いは附近の細河に鮮鱗を漁りて、満腔送別の情を尽くした。

七月四日、新聯隊長水島大佐着任す。高野少佐聯隊の将卒一同を代表して歓迎の辞を述べて曰く「隊長よ、願わくは我々をして適當の死処を得せしめよ」と豪壮なる意気に「頼もしき将卒哉」と嘆賞せしめた。

斯かる間に米国大統領ルーズベルトは、日露両国に向って講和を勧告し、両国共に其の好意を容れて全権委員を派遣するに至り、参謀総長山縣元帥は勅命を奉じて戦地に來り、七月二十五日講和に関する御沙汰を伝えた。

然しながら両軍は未だ対敵行動を中止せず、我は新たに編成したる第十三師団を樺太に派遣して同島を占領し、又八月十一日聯隊は、騎・砲・工兵の若干を併せて支隊を編成し、我が警戒線の前方にして、惹河右岸伊通州に通じる山道中にある老爺嶺偵察の命を受け、同夜半全家溝附近の前哨線を發して、泥寧を冒し濁流を渡りて老爺嶺に前進し、所在に高地上に現われて抵抗する監視兵を駆逐して、充分に敵線の所在及び兵力の配置等を偵察して同夜八時二十分全家溝に帰還した。此の偵察の結果は遂に之を実地に試みるに至らずして已んだ。

【平和克復及び凱旋】

九月一日両国全権委員の間に講和条約の調印を終わり、次いで同十六日正午以後満州全部に於いて休戦を実施し、両軍の中間に離隔地帯を設けて一切の戦闘行為は茲に中止されるに至った。

講和談判の結果は、露国は韓国に於ける我が帝國の優越権を承認し、満州に於ける撤兵を実行し以って我は完全に交戦の目的を達成したるのみならず、遼東半島に於ける租借権、南満州鉄道（長春以南）及び樺太島南半部を我に割讓する等、我国は数多の利益を獲得したる外、此の一戦に依り一躍世界第一等国の班に列し、国基之によりて愈々固く、国運之によりて益々進み、実に建国以来に最大光榮を担うに至った。而して我が国が之が為に支払へる犠牲は左の如くであった。

- ・人員 約十二万人（死亡又は服役免除約十一万八千人、捕虜となりたるもの約二千人）
- ・馬匹 約三万八千頭。
- ・艦船 九十一隻（軍艦十二、水雷艇等二十五、運送船五十四）
- ・臨時軍事費 約十五億千三百二十万円（陸軍十二億八千万円、海軍二億四千万円）

吾が聯隊の損害 戦死六三〇 負傷二、五七四 合計三千二百〇四名。（病没者の記載は無し）

（凱旋）

撤兵に関する協約発表せられ、我が満州軍は後備隊及び先発師団より遂次内地に凱旋を命ぜられ、聯隊は十二月五・六日両日に亘りて宿营地、方家屯を發して八日、熊官屯に集合し翌九日鉄嶺より鉄道輸送に依って十一日大連に到着し、十二日同地出帆、十五日先頭部隊を以って広島に到着、十八日より新津に向って広島を發車し、沿道官民の熱狂せるが如き歓迎をうけつつ十二月二十二日以後数日に亘って新発田屯營に凱旋した。同月三十日復員終わる。

参考文献

「大正十一年版 歩兵第十六聯隊史」より